

ポンプ 風水力で攻勢

荏原のポンプ事業が新型コロナウイルス感染拡大の影響から持ち直してきた。客先での設備立ち上げをコロナ禍でも継続するため、海外子会社の保守担当者をオンラインでトレーニングするなど工夫を凝らす。一方、半導体製造装置事業はコロナ禍においても好調に推移。顧客の設備の遠隔監視など、デジタル変革（DX）の取り組みも進む。浅見正男社長に今後の戦略を聞いた。

荏原社長 浅見 正男氏

—景況感はいかがですか。 — 4月に売り上げが落ちたが、5月に底を打った。建築設備向けも



コロナ禍、デジタル変革進展

落ち込みはあるが、納期が長い、大きな落ち込みはない。主力の標準ポンプを世界で販売し、成長分野の風

水力で攻勢をかける。IoT（モノのインターネット）やクラウドが拡大しており、半導体製造装置事業は好調期が長い、大きな落ち込みはない。主力の標準ポンプを世界で販売し、成長分野の風

中国、欧米の各拠点では全社員を対象に統合実施した。イスラエル業務ハック（ER）に約10台のポンプを納入した際にも、カメラを20台ほど取り付け、遠隔で作業をこなした。DXの進捗は。2030年ごろの当社の手がける設備幅14オングストローム

ム（オングストローム）技術ハードルがさらに上がる。研は100億分の1。世代半導体の量産期に磨の均一性、終点検出に向けた準備をする。世の正確さ、研磨で発生界シエア2位で主力のCMP（化学機械研）装置では、300点を置き、開発を進めたい。

「総合型」へ脱皮する時期

記者の目
—ITを活用した全社単位の取り組みは、国内外で事業の横展開を進める上で支えとなる。主力で祖業のポンプ事業のほか、世界で高シェアを握る半導体向けCMP装置の量産・サポートに力を入れる荏原。水関連のポンプ建設を手がける企業というイメージから「総合型」へ脱皮する時期になりそう。

（石宮由紀子）